

各 関 係 機 関 団 体 の 長 } 殿
各 病 害 虫 防 除 員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病害虫防除所)

令和4年度病害虫発生予報第3号(6月)について

このことについて、病害虫発生予報第3号を発表したので送付します。

予報第3号

6月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病害虫名	現況 (発生量)	6月の発生予報 (発生量)	
		平年比	平年比	前年比
かんきつ	そうか病 ミカンハダニ	並 少	やや多 少	やや多 並
なし	黒星病 ハダニ類	やや少 並	並 並	並 並
かき	炭疽病 フジコナカイガラムシ ハマキムシ類	やや少 並 並	並 並 並	並 並 並
果樹共通	果樹カメムシ類	—	やや多* (前年比)	
茶	炭疽病 もち病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャノキイロアザミウマ チャトゲコナジラミ チャノミドリヒメヨコバイ	並 少 少 多 少 やや多 やや多	やや多 少 少 多 少 並 やや多	やや多 並 並 多 並 多 並

注1) 予報の発生量は平年(福岡県の過去10年間)及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。

それぞれの条件は、少発生(-)、やや少発生(-~±)、並発生(±)、やや多発生(±~+)、多発生(+)として示し、+-を総合的に判断して発生量を予想しています。

* 果樹共通・チャバネアオカメムシの予報は前年比としています。

病害虫防除所のホームページでは、各種病害虫の発生状況を随時更新しています。
発生状況の把握や防除の参考にご活用下さい。

○福岡県病害虫防除所のホームページへのアクセス

URL: <https://www.jppn.ne.jp/fukuoka/> または右QRコード①

○Twitter (ツイッター) で定期情報や警報等発出のお知らせを始めました。

Twitterの本アカウント(福岡県農作物病害虫情報)へのアクセス

URL: https://twitter.com/PPDPO_Fukuoka または右QRコード②



<予想される向こう1か月の天候(令和4年5月28日~令和4年6月27日)>

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低20 並40 高40% 平年並か高い見込み	少20 並40 多40% 平年並か多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

(福岡管区气象台 令和4年5月26日発表1か月予報より抜粋)

【果樹：かんきつ】

1 そうか病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

発病葉率 0.1% (平年 0.2%、前年 0.1%)

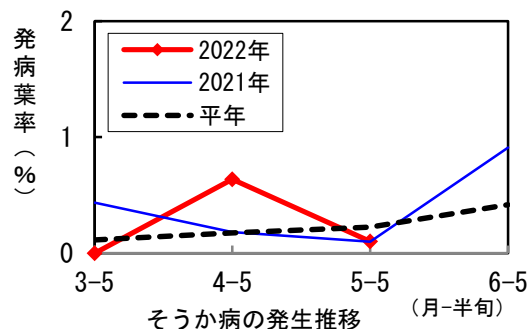
発生ほ場率 9.1% (平年 14.5%、前年 20%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(+)

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉は園外に持ち出し、幼果期の防除を徹底する。

イ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p9の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

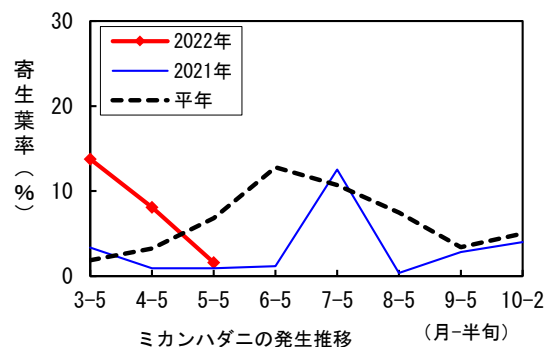
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

寄生葉率 1.5% (平年 6.8%、前年 0.9%)

発生ほ場率 36.4% (平年 41.8%、前年 9.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(-~±)。

(3) 防除上注意すべき事項



- ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。
- また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

【果樹：なし】

1 黒星病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（－～±）。

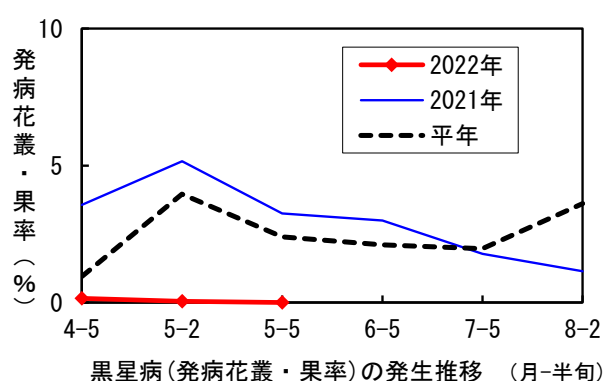
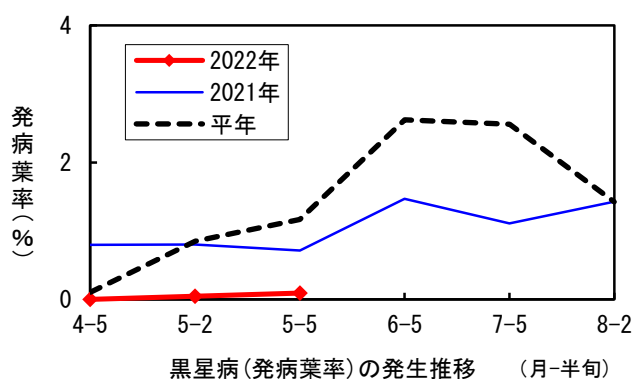
発病葉率 0.1%（平年 1.2%、前年 0.7%）

発生ほ場率 27.3%（平年 58.6%、前年 54.5%）

発病果率 0%（平年 2.4%、前年 3.3%）

発生ほ場率 0%（平年 53.2%、前年 36.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病葉や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

ウ 薬剤耐性菌の発生リスク低減のため、DMI 剤、QoI 剤、SDHI 剤、AP（アザリルピリジン）剤については同一系統剤の使用回数を年間で2回以内にとどめる。

これらの薬剤を用いる場合は、保護殺菌剤と混用することにより防除効果の維持が期待できる。

エ 「幸水」の果実は開花60日後以降、再び感染しやすくなるため、果実への感染防止に努める。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

寄生葉率 0.2%（平年 0.3%、前年 0.05%）

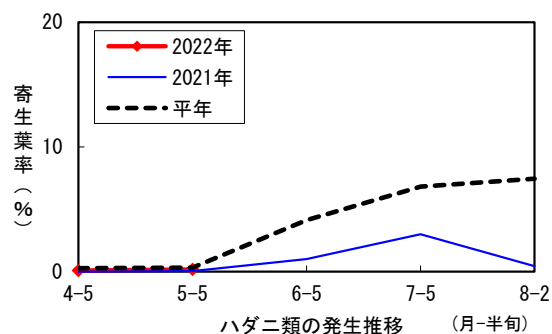
発生ほ場率 9.1%（平年 15.6%、前年 9.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（－～±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった（-～±）。

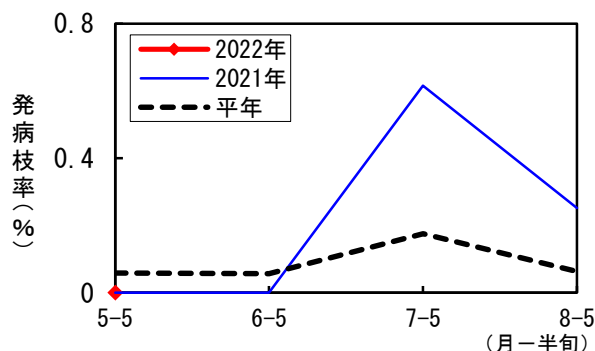
発病枝率 0%（平年 0.06%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 9.5%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている（±～+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。



新梢における炭疽病の発生推移（発病枝率）

2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であったが、多発している園も見られた（±）。

寄生枝率 0.7%（平年 1.2%、前年 0.6%）

発生ほ場率 9.1%（平年 38.2%、前年 18.2%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

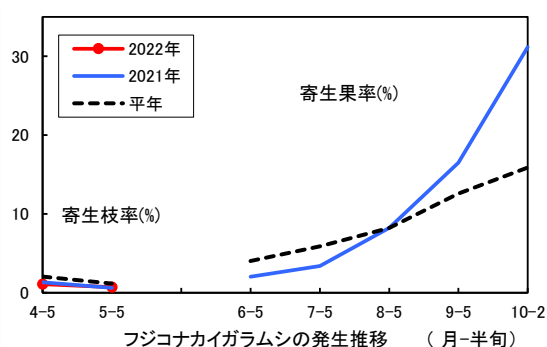
(3) 防除上注意すべき事項

ア 前年は、春期の発生量は平年並であったが、空梅雨や秋の高温の影響で9月以降多発した。特に前年多発した園では翌年も多発する傾向があるので、適期防除を怠らない。

イ 樹上での第1世代幼虫の孵化時期を確認し、約10日間隔で2回防除を実施する。

ウ 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。

エ 天敵への影響が比較的少ない薬剤で防除する。



フジコナカイガラムシの発生推移（月-半旬）

3 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによるチャノコカクモンハマキとチャハマキの誘殺雄成虫数は平年並であった（±）。

誘殺数 チャノコカクモンハマキ <うきは市> 168頭（平年 324頭、前年 223頭）

<八女市> 1,002頭（平年 623頭、前年 1,437頭）

チャハマキ <うきは市> 15頭（平年 325頭、前年 51頭）

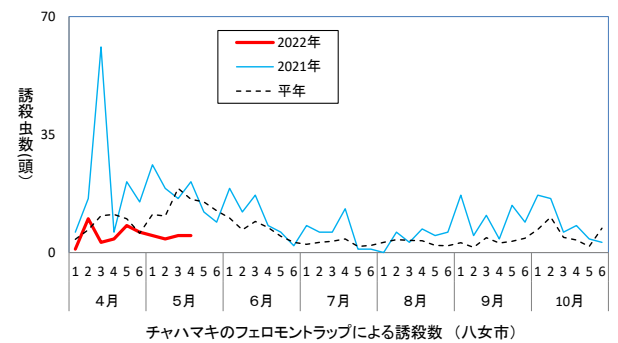
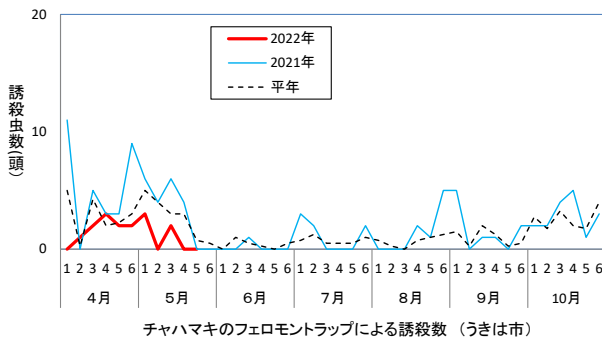
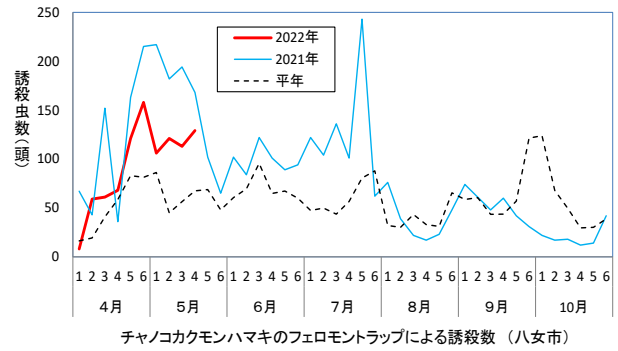
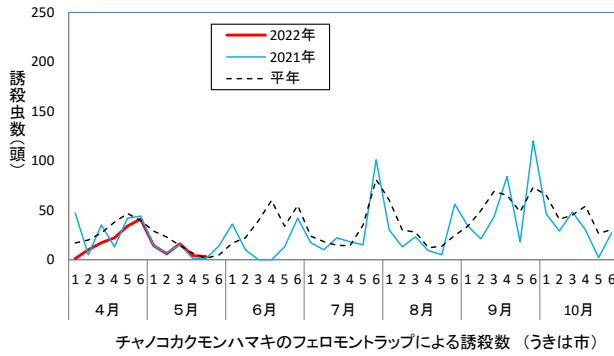
<八女市> 59頭（平年 120頭、前年 207頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア チャノコカクモンハマキとチャハマキの第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中～下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。

イ 幼虫は葉と葉が重なった部分や、へたと果実の間に多く潜んでいるため、散布むらがないよう十分量の薬量を丁寧に散布する。



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬～5月4半旬までのフェロモントラップによる成虫誘殺数は前年よりやや多く（±～+）、越冬成虫数が同程度であった2019年よりやや多かった。

誘殺数 <宗像市> 3頭（前年 6頭、2019年 6頭）
 <筑紫野市> 208頭（前年 22頭、2019年 36頭）
 <うきは市> 189頭（前年 196頭、2019年 0頭）
 <八女市> 7頭（前年 5頭、2019年 1頭）

イ 4月1半旬～5月4半旬までの予察灯による成虫誘殺虫数は前年よりやや多く（±～+）、2019年よりやや少なかった。

誘殺数 <飯塚市> 5頭（前年 0頭、2019年 8頭）
 <筑紫野市> 43頭（前年 94頭、2019年 48頭）
 <朝倉市> 13頭（前年 7頭、2019年 4頭）
 <うきは市> 1頭（前年 13頭、2019年 1頭）
 <八女市> 136頭（前年 75頭、2019年 280頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

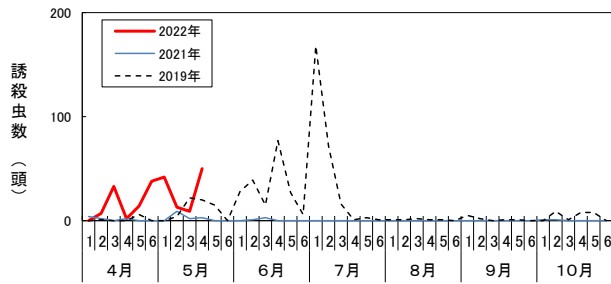
(3) 防除上注意すべき事項

ア 夜温が高くなると活動が活発になるので、気温の推移と地域の予察灯やフェロモントラップの誘殺状況を確認する。

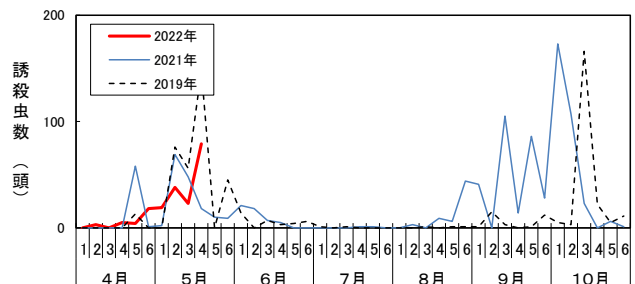
イ モモ、スモモ、ウメ、ナシ等への飛来や被害の発生状況は、地域や同一園内でも偏りがあるため、園内全体を注意して見回り発生に応じて防除を行う。

防除後、降雨があると薬剤の残効が短くなるので注意する。

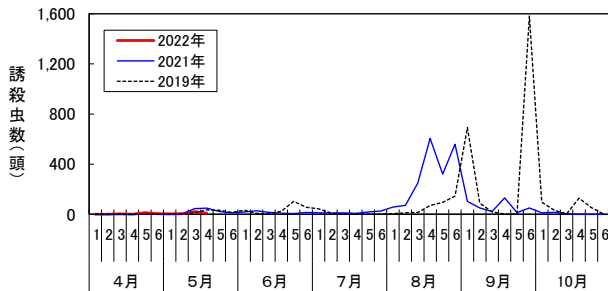
ウ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ (<https://www.jpnpn.ne.jp/fukuoka/>) を参照する。



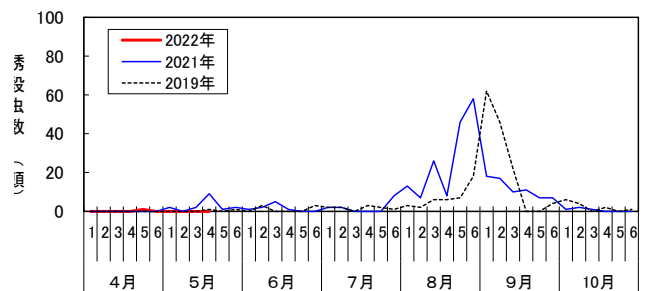
チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(筑紫野市吉木)



チャバネアオカメムシのフェロモントラップにおける誘殺数(うきは市吉井町)



チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺虫数の推移 (筑紫野市吉木)



チャバネアオカメムシの予察灯における誘殺虫数の推移 (うきは市浮羽町小塩)

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。

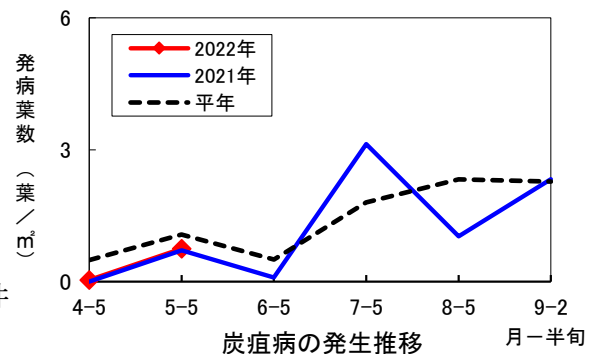
発病葉数 0.8葉 (平年 1.1葉、前年 0.7葉)

発病ほ場率 75% (平年 50.2%、前年 28.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

ア 雨滴により胞子が飛散伝搬するため降雨が多い6~9月に発生が増加するので、防除は降雨前日までに実施する。



2 もち病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(-)。

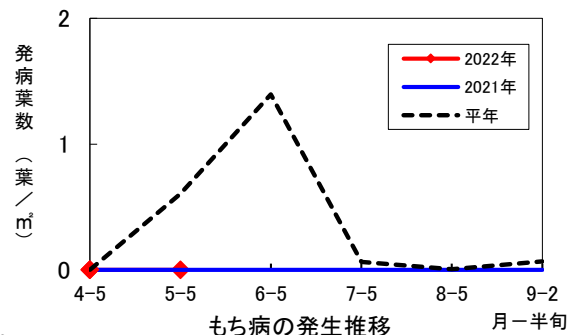
発病葉数 0葉 (平年 0.6葉、前年 0葉)

発病ほ場率 0% (平年 13.2%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや多発生の条件となっている(±~+)。

(3) 防除上の注意

ア 6~7月に降雨が多く、多湿の場合に発病しやすい。
摘採後の残葉での発生に注意し、萌芽期に他の病害虫との同時防除をおこなう。



3 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

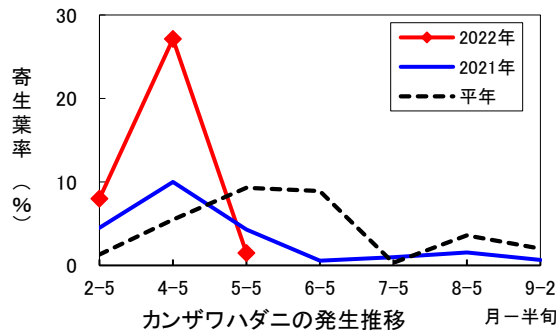
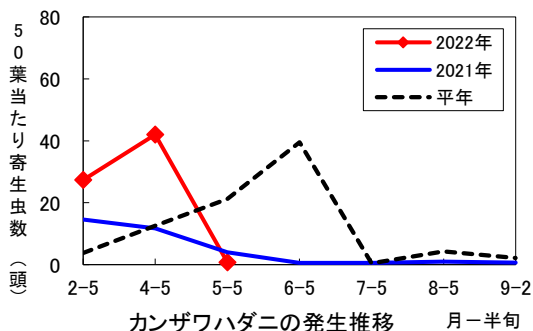
ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（-）。

50葉当たり虫数 0.8頭（平年 21.2頭、前年 4.0頭）

寄生葉率 1.5%（平年 9.3%、前年 4.3%）

発生ほ場率 50%（平年 51.2%、前年 42.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生条件となっている（-〜±）。



(3) 防除上の注意

ア 6月上〜中旬まで発生量が増加するので、発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は、効果の高い薬剤を裾葉や葉裏に薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

また、薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

4 チャノコカクモンハマキ

(1) 予報の内容

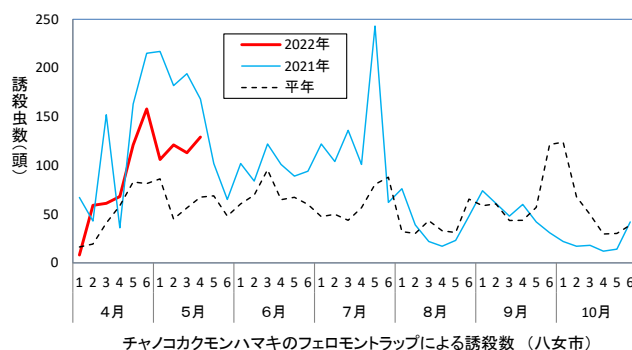
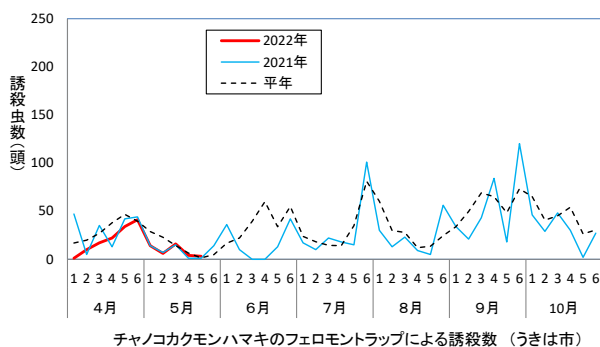
発生量：平年・前年より多

(2) 予報の根拠

ア 4月1半旬〜5月5半旬までのフェロモントラップによる誘殺虫数は、平年よりやや多かった（±〜+）。

誘殺数 <うきは市> 168頭（平年 324頭、前年 224頭）

<八女市> 1,002頭（平年 623頭、前年 1,539頭）



イ 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より多かった（+）。

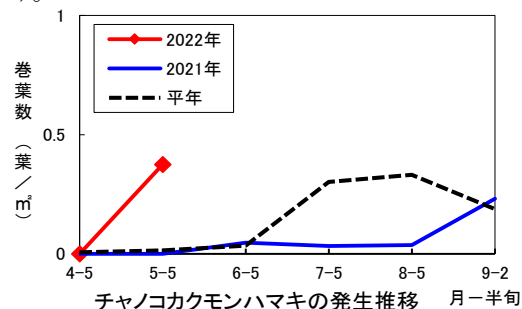
1㎡当たり巻葉数 0.4葉（平年 0.01葉、前年 0葉）

発生ほ場率 50%（平年 4.4%、前年 0%）

ウ 向こう1か月の気象予報では、並発生条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 第1世代成虫の発蛾最盛期は、例年6月中〜下旬頃である。ほ場での成虫の発生状況をよく観察し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。



- イ 卷葉後は防除効果が劣るため、卷葉が確認されたら、直ちに防除を行う。

5 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

たたき落とし虫数 0.1頭（平年 1.3頭、前年 0.04頭）

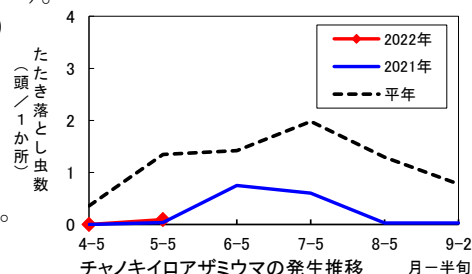
発生ほ場率 25%（平年 56.8%、前年 14.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 発生量は5月中旬から増加し、6～7月に最も多くなる。

B5判板上の10回たたき落とし法で、10頭以上見られる場合は防除を行う。



6 チャトゲコナジラミ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

寄生葉率 3.8%（平年 2.5%、前年 2.0%）

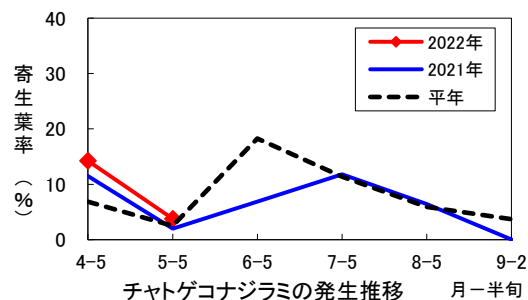
発生ほ場率 50%（平年 28.5%、前年 42.9%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 防除適期は若齢幼虫発生期で、第一世代幼虫の防除適期は、山間地では5月下旬～6月上旬頃（平坦～中山間地では5月中～下旬頃）であるため、成虫の発生状況をよく観察し発生がほとんど見られなくなった頃から、他の病害虫との同時防除を徹底する。

イ 幼虫は葉裏に発生しているので、農薬の散布にあたっては、葉裏に薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。



7 チャノミドリヒメコバイ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 5月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±～+）。

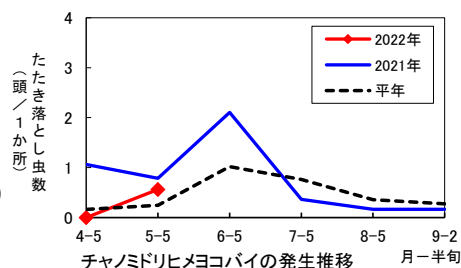
たたき落とし虫数 0.6頭（平年 0.2頭、前年 0.8頭）

発生ほ場率 75%（平年 35.1%、前年 57.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上の注意

ア 二番茶期の発生状況に注意し、B5判板上の10回たたき落とし法で、4頭以上見られる場合は防除を行う。



農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、農薬適正使用の指導を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。使用者の安全はもちろん、周囲の人畜・隣接作物・河川等への配慮についてもご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

○農薬散布の実施において、周囲の生産者、住民に周知を図る。

3 保護具の着用

○農薬の散布前に、ラベルの注意・警告マークをよく確認する。マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用し、薬液を作成する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄し、残液はほ場外への流出や環境や後作に影響を与えないよう配慮して、ほ場内の農作物が植え付けされていない土壌にまく。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、地域の農業用廃プラスチック適正処理推進協議会が実施する回収や、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。また、野焼きは『廃棄物の処理及び清掃に関する法律（廃掃法）』で禁止されているので、絶対に行わない。